■研究発表論文

奥能登珠洲における小・中学生への祭礼文化の継承の実態に関する研究

Inheritance of Traditional Festival Culture by Elementary and Middle School Students in Okunoto-Suzu, Ishikawa Prefecture

堀内　美緒*　　熊澤　栄二**

Mio HORIUCHI　Eiji KUMAZAWA

Abstract: Traditional festivals in rural regions were the pride of the region and the nucleus of the community, and played a major role in the continuation of regional society. However, declining fertility rates have meant that retaining supporters and passing on the traditions have become increasingly difficult. The purpose of this study is to understand the realities of how traditional arts in local traditional festivals are passed on to elementary and middle school students, and to clarify the issues required, using Suzu City, Ishikawa Prefecture, Japan as its subject. We interviewed the principals of nine elementary schools and four middle schools in order to understand the situation of activities concerning traditional arts such as drums and flutes at each school. Next, we conducted a questionnaire for all elementary and middle school students, collected 976 responses (97% return rate) and used cross tabulation to analyze the relationship between passing on traditional arts and personal attributes. As a result, it was made clear there were differences in the inheritance process depending on region and family/sibling structure.

Keywords: *traditional arts, regional difference, elementary and junior high school students, succession, questionnaire survey*
キーワード：伝統芸能，地域差，小・中学生，継承，アンケート調査

1．はじめに

農村地域の祭礼は地域の誇りやコミュニティの核となり，地域社会の持続に大きな役割を果たしてきた。祭礼では，子どもも伝統芸能奉納の担い手などの役割が与えられ，それらの伝統芸能はかつてはコミュニティの中で上から下の世代へ自然と継承されていた [1]。現代社会においても，子どもが囃子など伝統芸能の継承活動に関わることは，近所の異年齢の仲間づくり能力醸成，地域への関心・愛着心育成に効果があることが明らかにされている [2]。子どもが伝統芸能を継承する過程において，郷土愛や地域の誇り，コミュニティ間の絆も一緒に継承され，そのことがひいては地域社会の持続につながっていたことが考えられる。

しかし，近年では，祭礼そのものの維持が困難になってきており，その要因としては，人口減少などの「社会構造の変化」や「祭礼への関心の低下」が挙げられている [3]。文化の担い手である若者や子どもの量的な減少に加えて，娯楽や価値観の多様化などにより継承が困難となっているのであり，担い手の確保や育成が急がれる。祭礼の担い手不足の対策としては，都市との交流により，外部者の力を借りる体験型観光がひとつの手段としてあげられる [4]。しかし，将来の地域社会を担う地域の子どもへの継承が喫緊の課題であることは論を俟たないであろう。伝統芸能の伝承活動を推進し，地域づくりへの活用につなげる上で求められる行政支援の一つとして，学校教育への導入があげられており [5]，地域にとっても学校教育との連携が重要であることが指摘されている [6]。さらに，子どもの地域愛着心の育成につなげるためには小・中学校の段階が重要であるといわれている [2]。

そこで，本研究では，少子化の進行が深刻な地域において，子どもへの祭礼文化の継承がどの程度どのように行われているのか，祭礼文化の継承に学校はどのように関わっているのかを調査し，その実態を把握した上で，必要とされている課題を明らかにし，具体的な対策の提案につなげることを目的とした。なお，地域の祭礼文化を考える際，小・中学生は社会性と役割をもちながら伝統芸能（囃子，舞踊など）に関わり始める重要な段階であり，それを学習する過程で地域の祭礼文化の精神性や技術なども継承していくと考えられることから，本研究においては小・中学生による伝統芸能の継承実態に焦点を絞った。

2．研究方法

（1）対象地

研究対象地の珠洲市は，石川県の奥能登に位置し，面積247.2km^2，人口18,058人（2008年）である。珠洲市を含む「能登の里山里海」は2011年6月，国連食糧農業機構の世界農業遺産に認定され，農林漁業の営みや風土と密接に関わり合った祭礼文化は里山里海の重要な構成要素として評価された。奥能登の祭礼では，神事や神輿巡行を基本として，神輿のお供としてキリコと呼ばれる巨大な御神灯が担ぎ出されるもの，曳山や燈籠山といった山車が曳き出されるもの，の2種類が主流である。その他にも，曳山とキヤラゲ [7]，キリコと奴振り又は狂言などが組み合わさったものや，獅子舞が奉納されるものなど多種多様な祭礼がみ

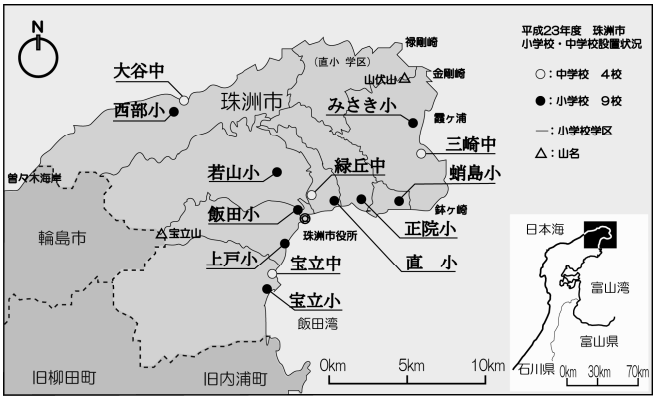


図 - 1　珠洲市の小・中学校の位置と小学校学区の範囲

*金沢大学地域連携推進センター　　**石川工業高等専門学校・建築学科

られる。さらには，同じ地区でも春，夏，秋それぞれの祭礼ごとに出し物が異なることが多い。キリコや山車の巡行には，太鼓，横笛，かねの3種類の楽器を基本とする囃子が欠かせず，それらを担うのは主に子どもであるが，珠洲市の年少人口（0～14歳）割合は9.2%（2008年）で少子化が深刻である。小・中学校の統廃合が進み，1954年から2011年の間に，小学校は24校2分校から9校に，中学校は10校4分校から4校に減少した（図 - 1）。

珠洲市の小学校学区は，歴史的・文化的な地域単位である公民館区[3]にほぼ一致するため，本研究では地域や祭礼文化の特徴を表す単位として小学校学区（以下，「学区」）を扱う。各学区の地域と祭礼の特徴を表 - 1 に示した。祭礼文化継承の地域の最小単位であり，ほぼ大字の範囲に一致する行政区については，珠洲市全体で221地区あり，各学区に16～37地区存在する。祭礼は複数の行政区が合同で開催することが多いが，それでも同一の祭礼を開催する地区（以下，「祭礼地区」）は，珠洲市全体で63地区あり，各学区に1～13地区存在する。同じ祭礼地区でも行政区によって囃子のリズムや出し物の種類・特徴が違うことが多く，それが珠洲市の祭礼文化の多様性，コミュニティ間の絆やアイデンティティ醸成につながっていることが特徴である。

表 - 1　珠洲市の学区の概要

学区名 小学	学区名 中学	年少人口割合[1]	行政区数[2]	祭礼地区数[3]	地域・祭礼の特徴
宝立	宝立	10.4	35	6	内浦に面し，半農半漁。七夕にキリコがでる。秋祭りはキリコの地区と，曳山・キヤラゲの地区あり。
みさき	三崎	9.6	21	13	半農半漁。秋祭りの主な出し物はキリコだが，獅子舞や奴振りなどの地区もあり。
西部	大谷	7.9	29	11	外浦に面し，半農半漁。塩田の体験施設が増加。夏に塩田に縁のある砂取節まつりが開催。秋祭りにはキリコ，獅子舞が主。
上戸	緑ヶ丘	13.1	20	1	市庁所在地。山間部～海岸が範囲。七夕はキリコ，秋祭りは曳山とキヤラゲが主。
蛸島	緑ヶ丘	12.3	17	1	漁業が盛ん。漁師町で，秋祭りの出し物は総漆塗りの豪華なキリコと早船狂言。
直	緑ヶ丘	12.1	25	10	内浦（農業中心）～半島最北端の外浦（半農半漁）が範囲。外浦側は市内一，人口減少が進行している。秋祭りにキリコがでる。
飯田	緑ヶ丘	11.9	16	1	商業の中心地。夏祭りは燈籠山が主。最近は夏にYOSAKOIソーランや盆踊り大会も開催。秋祭りはキリコが主。
正院	緑ヶ丘	11.6	21	7	農業と商業が中心。秋祭りはキリコと奴振りが主。曳山の地区もあり。
若山	緑ヶ丘	9	37	13	山間に位置し，盆と秋祭りには主にキリコがでる。虫送りなど多くの農耕儀礼も残る。
珠洲市全体		10.4	221	63	

1)2005年国勢調査から作成
2)珠洲市教育委員会資料：2011年12月1日現在
3)秋祭りはほぼ全ての祭礼地区において開催されるため，秋祭りの祭礼数をもって祭礼地区数を算出した。資料：珠洲市(2011) 珠洲市の秋祭りカレンダー，商工珠洲213号，p.8

（2）小・中学校の校長へのヒアリング

本研究では，学校と祭礼や伝統芸能に関する活動との関わり方を把握するために，9小学校，4中学校の校長にヒアリングを行った。調査期間は2011年1月～4月で，1校につき2時間程度かけた。調査項目は，1)祭礼をテーマとした地域学習の有無について，2)学校と祭礼文化継承活動の関わり方について，3)通学範囲など基礎情報について，とした。地元出身で継承活動に詳しい教員がいる場合は，校長へのヒアリングの場に同席してもらった。

（3）小・中学生へのアンケート調査

次に，小・中学生の祭礼に関わる伝統芸能の継承実態を把握するため，珠洲市の全小・中学生（9小学校，4中学校）を対象としてアンケート調査を行った。回答項目は，1)基本属性（学年，性別，地区，一緒に住んでいる家族，課外活動の有無，塾通い有無），2)地区の祭礼への参加状況，3)伝統芸能の経験有無と経験したときの年齢，継承内容（練習場所，教えてもらった人物，始めた理由，好き嫌い），である。項目3)では，郷土資料[8)9)]や校長へのヒアリング結果から，珠洲市の多くの祭礼で小・中学生が伝統的に担い，地域の祭礼文化に深く関わっていると判断した5種類の伝統芸能（太鼓，横笛，かねの3種類の楽器および獅子舞，キヤラゲの2種類の舞踊）を取り上げた。それ以外の楽器と舞踊についても回答できる欄を1つずつ設けた。

アンケート票は，表現や漢字使用を学習段階に合わせて変え，1，2年生用，3，4年生用，5，6年生用，中学生用と4種類作成した。アンケート調査の実施前には，アンケート票を全学校長にチェックをしてもらい，それを受けて最終的なアンケート票を作成した。アンケート票の配布，回収は珠洲市教育委員会を通じて行った。配布数は，珠洲市の全児童・生徒を対象とし，小学生631票，中学生379票，合計1010票であった。児童・生徒のアンケート記入については各校に任せた。回答期間は，2011年7月1～14日であった。回収されたアンケートの回答票は小学生606票（回収率96.0%），中学生370票（回収率97.6%），合計で976票（回収率96.6%）であった。

表 - 2　珠洲市の小・中学校における祭礼文化継承活動

学校名		児童・生徒数[1]（人）	学校と継承活動・地域との関わり	学校における継承活動：授業に組み込まれているもの ※【総】総合学習の時間，【音】音楽の時間，－：特になし	学校における継承活動：その他
小学校	宝立	76	基本的に地域に任せる	－	－
小学校	みさき	104	基本的に地域に任せる	（特定の地区と付き合うことはできないので，祭礼は取り組みにくい）	・過去に音楽集会で地区の祭り太鼓
小学校	西部	29	学校は地域の中心，よりどころ，情報発信の場であり，地域と一緒にあることが大切	（今後，総合・音楽の時間に砂取り節の民謡を歌える継承者を育てる活動をする予定）	・運動会で砂取節（体育の時間に練習） ・文化祭で芸能発表 ・放課後，公民館で「伝承クラブ」（4年生以上全員参加）
小学校	上戸	59	基本的に地域に任せる	【音・総】「竜神太鼓（創作太鼓）」選択可能（指導は地域の人や地元出身の教員）。	・祭礼の日にキヤラゲを学校でも披露
小学校	蛸島	74	総合学習を利用して全児童が太鼓を継承	【総】3～6年生全員が太鼓の練習（指導は地域の人），高学年は祭礼で披露	－
小学校	直	91	地域の伝統行事を取り入れる事は必要だが，学校の役割をはっきりさせて地域とバランスをとる事が大切	【音】和太鼓の授業あり	－
小学校	飯田	89	基本的に地域に任せる	【総】地域を調べる過程で祭礼についても触れる	－
小学校	正院	61	基本的に地域に任せる	【総】「奴振りの見学」と「祭りの学習」を行う	－
小学校	若山	48	地域に子供が役に立っていることが大切	【総】地域行事の調査，参加 【音・総】太鼓・笛の練習（指導は地域の人）	・公民館からの依頼で地域行事に参加。児童が太鼓・笛演奏や踊り披露
中学校	宝立	45	地域に任せたら生徒への太鼓・横笛の継承が難しくなっていた。学校に関係者がいたとき伝承された。	－	・教員が関わって，公民館でキリコ太鼓・横笛教室（指導は地域の若者）
中学校	三崎	62	祭礼に関わる中で継承されており，改めて学びにいく必要ない。地区によって横笛や太鼓のリズムが違うので学校で一同に教えることはできない。	－	・文化祭でドテラの着付けショー
中学校	大谷	23	生徒は小学生の時に太鼓・横笛を習得。子どものいない地区からの要請があれば生徒の協力を許可。	【総】キリコや祭礼を調べる年あり（テーマは生徒が決める）。	・文化祭で祭り太鼓の演奏 ・体育祭で地域の人と砂取り節を踊る
中学校	緑ヶ丘	249	地域との関わりより勉学に力点を置いている。ただし，祭礼の日は学校が終わり次第，帰宅させる。	【音】横笛の授業あり	・1998～2005頃，文化祭で地域ごとの郷土芸能の出し物披露

1)珠洲市教育委員会資料：2011年7月1日現在

３．結果

（１）学校と祭礼文化継承活動との関わり

表 - 2 に，珠洲市の小・中学校の児童・生徒数と校長へのヒアリング結果をまとめた。珠洲市の小・中学校は，祭礼や地域の伝統の大切さを感じていたが，学校と地域の役割を考慮して，地域で継承活動が行われているところは，地域に任せる態度をとっている学校が多かった。また，どの学校でも地域の祭礼の日には，祭礼責任者や保護者からの要請を受けて，児童・生徒が祭礼に参加するために早退することを許可していた。地域の祭礼文化の学習については，総合学習で児童・生徒がテーマに選んだ場合は調べてまとめることはあったが，学校で先生が授業の中で教えることはほとんどなかった。

太鼓・横笛などの継承活動については，地元出身で指導ができる教員が学校にいる場合，地域と教員両方の立場をうまく利用して，総合や音楽の時間に太鼓を教えていたり（上戸小），放課後に公民館などを利用して太鼓・横笛教室を開いたり（宝立中）している場合があった。逆に，祭礼や囃子の継承に危機感をもつ地域の人が学校に働きかけ，総合の時間を使って３年生以上の児童すべてが祭り太鼓を習得するしくみができている学校もあった（蛸島小）。ただし，蛸島小のように学区と祭礼地区が一致する場合は稀で，13 の祭礼地区が存在する三崎小のような場合，「地区によって祭り太鼓・横笛のリズムが違うので一同に教えることはできない，学校で教えてしまうと逆に地域の伝統を破壊することになる」という意見もあった。

年少人口割合が低い学区では，学校と地域とのつながりがより強い傾向がみられた。年少人口割合が 9%の若山小では，地域行事に児童が参加することが学校の行事に組み込まれ，そこで囃子や舞踊を担うために，授業で必然的に継承が行われていた。一番年少人口の少ない西部小（年少人口割合 7.9%）では，祭礼前になると，放課後に４年生以上の児童は全員，公民館の「伝承クラブ」に参加し，太鼓や横笛，獅子舞を地域の人から継承するしくみができていた。珠洲市の多くの学校では，運動会や文化祭は保護者だけでなく地域の人も参加する地域行事になっており，その場が児童・生徒の太鼓，横笛や舞踊など伝統芸能の披露の場になっている地域もあった（西部小，三崎中，大谷中）。

（２）小・中学生の伝統芸能の参加状況

１）伝統芸能の経験

小・中学生の伝統芸能の経験者数は，太鼓は 608 人（62.3%），かねが 356 人（36.5%），横笛が 143 人（14.7%），キヤラゲが 77 人（7.9%），獅子舞が 35 人（3.6%）であった。それ以外の楽器や舞踊の経験についても回答を求めた結果，楽器については貝笛など，11 人の回答があった。その他の舞踊についても 162 人が回答し，巫女舞や奴振，砂取節，町内の踊りや花笠音頭など学区ごとに特色あるものが挙げられた。今回は，祭礼文化継承の全体像を把握する有効な結果が得られなかったため，分析対象から外した。

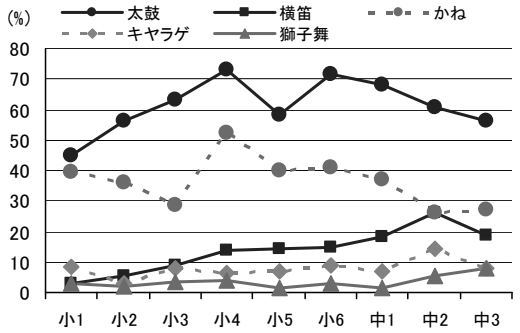


図 - 2 学年と囃子・舞踊の経験割合変化

図－2 は，伝統芸能の継承者数の学年全体に占める割合の推移を示したものである。太鼓とかねは学年があがると継承者数があがるわけではないことが明らかとなった。この理由としては，開始年齢を聞いたところ，太鼓では小学校 1 年生にあたる 6 歳（22.7%）が一番多く，5～7 歳で始める児童が 53.5%を占め（有効回答数 550 人），かねも小学校入学前後の 5～7 歳で始める人が 53.6%を占めた（有効回答数 317 人）ことから，児童・生徒による太鼓とかねの関わりは，小学校入学前後の段階で凡そ決まってしまうことが考えられた。一方，習得が難しい横笛は，学年があがるにつれ継承者の割合が増え，開始年齢は 10 歳（18.3%）が一番多く，9～11 歳で 50.8%を占めた（有効回答数 126 人）。

担う年齢が凡そ決まっているキヤラゲは小学校低学年の 7，8 歳で継承した児童・生徒が多く，学年があがってもそれほど継承者の割合は増加しなかった。獅子舞は 11 歳で経験する児童・生徒が多く，中学 2，3 年生（14，15 歳）になると経験者割合が増加した。

２）伝統芸能の経験と児童・生徒の属性との関係

児童・生徒の回答者の属性（学校，性別，一緒に住んでいる家族及び兄弟構成，課外活動有無，塾通い有無，祭礼参加頻度，組み立て経験有無）と伝統芸能の経験との関係を分析するためにクロス集計を行い，関連性について χ^2 検定を行った。

表 - 3 は伝統芸能の経験と学校との関係のクロス分析の結果である。太鼓，横笛，かね，キヤラゲ，獅子舞すべてにおいて，学校による経験の差がみられた。太鼓の経験者の割合は，蛸島小と三崎小・中（学区としては蛸島，三崎）が高かった。横笛とかねは西部学区で経験者の割合が高かった。キヤラゲと獅子舞は行われる祭礼地区が限定される関係から，キヤラゲは上戸小，宝立小・中，飯田小，正院小の 5 学校（上戸，宝立，飯田，正院の 4 学区），獅子舞は西部小，大谷中，宝立小・中の 4 学校（西部，宝立の 2 学区）の児童・生徒の経験が多かった。

性別との関係をみると（表 - 4），太鼓とキヤラゲの経験者は男子が多く，性別による有意な差がみられた。横笛は女子，かねは男子が多い傾向がみられたが，有意な差ではなかった。

回答者の一緒に住んでいる家族構成（表 - 5）は，祖父母と一緒に住んでいる三世代が一番多く（957 人中 631 人），次いで核家族が多かった（278 人）。曽祖父母と一緒に住んでいる四世代（48 人）は少なかった。伝統芸能の経験と家族構成の関係をみると，横笛やかねは三世代に経験者の割合が高く，太鼓やキヤラゲ，獅子舞は四世代の割合が高い傾向がみられた。

回答者の一緒に住んでいる兄弟構成（表 - 6）をみると，兄か姉しかいない末子が一番多く（965 人中 342 人），一緒に住んで

表 - 3　学校と伝統芸能の経験の関係

	太鼓***		横笛***		かね***		キヤラゲ***		獅子舞***	
	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし
宝立小 (n=72)	69.4	30.6	4.2	95.8	19.4	80.6	13.9	86.1	6.9	93.1
みさき小 (n=93)	76.3	23.7	9.7	90.3	33.3	66.7	0.0	100.0	1.1	98.9
西部小 (n=29)	75.9	24.1	27.6	72.4	65.5	34.5	0.0	100.0	17.2	82.8
上戸小 (n=51)	54.9	45.1	7.8	92.2	54.9	45.1	31.4	68.6	0.0	100.0
蛸島小 (n=74)	85.1	14.9	9.5	90.5	44.6	55.4	1.4	98.6	0.0	100.0
直小 (n=90)	57.8	42.2	8.9	91.1	57.8	42.2	2.2	97.8	1.1	98.9
飯田小 (n=89)	29.2	70.8	20.2	79.8	36.0	64.0	9.0	91.0	2.2	97.8
正院小 (n=61)	70.5	29.5	9.8	90.2	42.6	57.4	6.6	93.4	3.3	96.7
若山小 (n=47)	51.1	48.9	6.4	93.6	17.0	83.0	2.1	97.9	2.1	97.9
宝立中 (n=44)	36.4	63.6	13.6	86.4	13.6	86.4	36.4	63.6	4.5	95.5
三崎中 (n=62)	80.6	19.4	21.0	79.0	37.1	62.9	1.6	98.4	3.2	96.8
大谷中 (n=22)	54.5	45.5	59.1	40.9	50.0	50.0	0.0	100.0	31.8	68.2
緑ヶ丘中 (n=242)	62.4	37.6	18.6	81.4	30.2	69.8	7.4	92.6	2.9	97.1
全体 (n=976)	62.3	37.7	14.7	85.3	36.5	63.5	7.9	92.1	3.6	96.4

数値の単位は%である。網掛け部分は上位2件である。
χ 2検定による：*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001、－：N.S.

いる上の兄姉がおらず，弟か妹だけがいる長子が次いで多く（328人），兄か姉と弟か妹がいる中間子が少なかった（163人）。伝統芸能の経験との関係をみると，太鼓，横笛，かね，キヤラゲにおいて中間子に経験者の割合が高い傾向がみられた。

放課後の課外活動（表 - 7）は，有効回答者944人のうち643人（68.1%）が行っており，課外活動をしていない場合よりもすべての伝統芸能において経験者の割合が高い傾向がみられた。特に，横笛とキヤラゲの経験有無は課外活動の有無と有意な差がみられた。塾通いの有無と伝統芸能の経験有無については，関連性はみられなかった。

キリコや山車の組み立ての手伝い経験（表 - 8）では，有効回答者904人うち組み立ての経験者は277人（30.6%），経験なしは627人（69.4%）であった。組み立て経験があると，太鼓，横笛，かね，キヤラゲの経験がある割合も高くなり，有意差がみられた。

地区の祭礼への参加頻度は，有効回答者905人のうち「毎年必ず行く」が687人（75.9%），「時々行く」が142人（15.7%），「行かない」は20人（2.2%），「他の地区に行く」は56人（6.2%）であった。「毎年必ず行く」と回答した児童・生徒は，太鼓，横笛，かねの経験もあると回答する割合が高かった。

（3）伝統芸能の継承実態について

1）伝統芸能による「練習場所」「教えてもらった人」「始めた理由」の違い

伝統芸能ごとの練習場所，教えてもらった人，始めた理由を示したものが図 - 3～5である。練習場所については，太鼓は「公民館」「集会所」「自分の家」が多かった。横笛は，「公民館」「自分の家」が多く，かねについては「練習はしていない」が半数以上を占めた。キヤラゲは「近所の家」，獅子舞は「公民館」「集会所」の回答が多かった。

教えてもらった人については，太鼓とかねのように誰でも関わる機会の多いものは，お父さんやお兄さんなど身近で年代も近い人から教えてもらう割合が他の伝統芸能に比べて高かった。横笛やキヤラゲ，獅子舞など人数や地域が限られているものは「近所の大人」から教えてもらう割合が他の伝統芸能よりも高くなった。「その他」については太鼓や横笛は，「太鼓の先生」「横笛の先生」「友達」などであるが，かねについては「教えてもらっていない」という回答が多かった。

始めた理由については，太鼓は「保育所や学校の活動」をあげる人が他の伝統芸能よりも高く，横笛とかねは「自分がやりたかったから」という回答が高かった。キヤラゲや獅子舞など地域が

表 - 4　性別と伝統芸能の経験との関係

	太鼓***		横笛-		かね-		キヤラゲ***		獅子舞-	
	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし
女(n=475)	50.5	49.5	16.4	83.6	33.9	66.1	2.7	97.3	3.4	96.6
男(n=495)	73.3	26.7	12.9	87.1	39.0	61.0	12.7	87.3	3.8	96.2
全体(n=970)	62.2	37.8	14.6	85.4	36.5	63.5	7.8	92.2	3.6	96.4

数値の単位は%である。χ2検定による;*:p<0.05、**:p<0.01、***:p<0.001、-:N.S.

表 - 5　家族構成と伝統芸能の経験との関係

	太鼓***		横笛-		かね-		キヤラゲ*		獅子舞-	
	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし
核家族(n=278)	49.3	50.7	11.9	88.1	32.4	67.6	6.1	93.9	3.2	96.8
三世代(n=631)	67.2	32.8	16.3	83.7	38.7	61.3	7.9	92.1	3.6	96.4
四世代(n=48)	77.1	22.9	12.5	87.5	29.2	70.8	18.8	81.3	6.3	93.8
全体(n=957)	62.5	37.5	14.8	85.2	36.4	63.6	7.9	92.1	3.7	96.3

数値の単位は%である。χ2検定による;*:p<0.05、**:p<0.01、***:p<0.001、-:N.S.

表 - 6　兄弟構成と伝統芸能の経験との関係

	太鼓*		横笛-		かね***		キヤラゲ-		獅子舞-	
	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし
長子(n=328)	61.9	38.1	14.6	85.4	36.6	63.4	7.6	92.4	2.7	97.3
中間子(n=163)	71.2	28.8	17.8	82.2	45.4	54.6	10.4	89.6	4.3	95.7
末子(n=344)	62.5	37.7	14.0	86.0	38.7	61.3	6.1	93.9	3.8	96.2
一人っ子(n=130)	52.3	47.7	13.1	86.9	19.2	80.8	10.0	90.0	4.6	95.4
全体(n=965)	62.4	37.6	14.7	85.3	36.5	63.5	7.9	92.1	3.6	96.4

数値の単位は%である。網掛け部分は上位1件である。
χ2検定による;*:p<0.05、**:p<0.01、***:p<0.001、-:N.S.
ここでの兄弟構成とは，一緒に住んでいる兄弟の中での順位を示している

表 - 7　放課後の課外活動と伝統芸能の経験との関係

	太鼓-		横笛**		かね-		キヤラゲ*		獅子舞-	
	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし
課外活動している(n=643)	63.8	36.2	17.3	82.7	38.1	61.9	9.2	90.8	4.0	96.0
していない(n=301)	58.8	41.2	9.3	90.7	34.9	65.1	5.0	95.0	3.0	97.0
全体(n=944)	62.2	37.8	14.7	85.3	37.1	62.9	7.8	92.2	3.7	96.3

数値の単位は%である。χ2検定による;*:p<0.05、**:p<0.01、***:p<0.001、-:N.S.

表 - 8　キリコや山車の組み立ての手伝い経験との関係

	太鼓***		横笛***		かね***		キヤラゲ**		獅子舞-	
	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし	経験あり	なし
組み立て経験がある(n=277)	75.8	24.2	21.3	78.7	51.3	48.7	11.9	88.1	4.7	95.3
ない(n=627)	54.9	45.1	12.3	87.7	30.0	70.0	6.5	93.5	3.3	96.7
全体(n=904)	61.3	38.7	15.0	85.0	36.5	63.5	8.2	91.8	3.8	96.2

数値の単位は%である。χ2検定による;*:p<0.05、**:p<0.01、***:p<0.001、-:N.S.

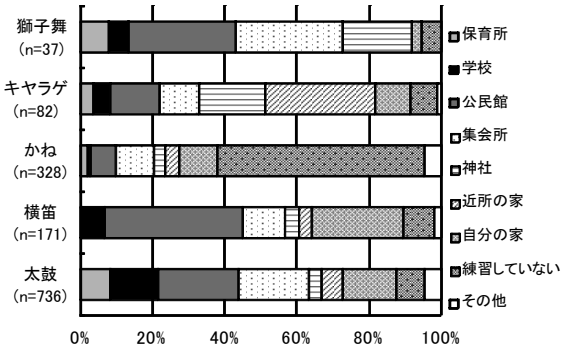


図 - 3　練習場所（複数回答）

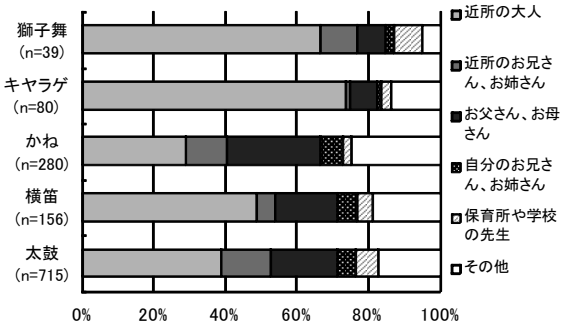


図 - 4　教えてもらった人（複数回答）

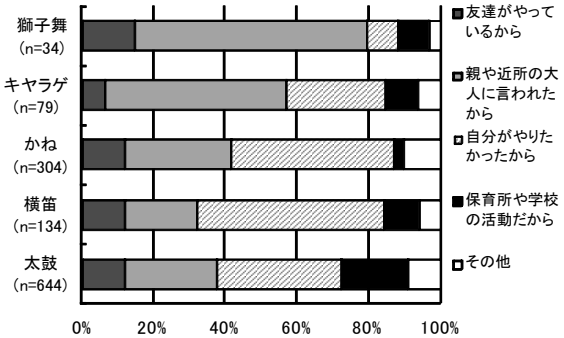
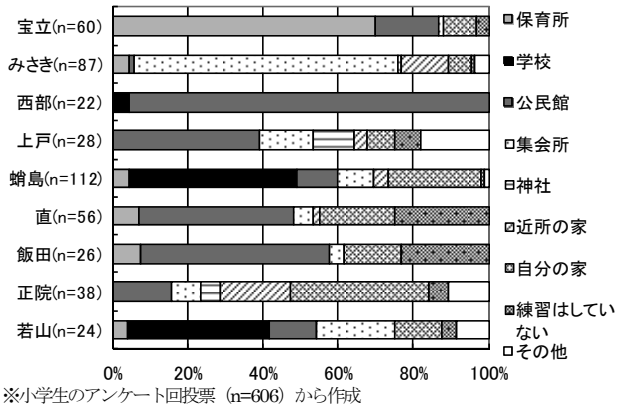


図 - 5　始めた理由（複数回答）

限定してくるものになると，親や近所の人に言われて始めることが多くなっていた。

2）学区による「練習場所」「教えてもらった人」「始めた理由」の違い

どの祭礼においても基本となる太鼓，横笛，かねの楽器に特に注目して，その継承過程と地域の特徴を表す単位である学区との関係をみると大きな違いがみられた。太鼓の練習場所について，若山・蛸島は「学校」の回答割合が高く，上戸・西部・飯田・直は「公民館」，三崎は「集会所」，正院は「自分または近所の家」，宝立では「保育所」の回答割合が顕著に高かった（図 - 6）。教えてもらった人は練習場所に連動し，若山・蛸島では学校に教えに来てくれる「太鼓の先生」や「ボランティア」という回答が多く，上戸や西部では「公民館や伝承クラブの先生」，「近所の大人」という回答が多かった。飯田や直は練習場所として「公民館」の次に「自分の家」の回答が多く，教えてもらった人は「お父さん，お母さん」「自分のお兄さんやお姉さん」という回答が多かった。集会所が練習場所の三崎では近所の人から，自分または近所の家が練習場所の正院では，自分の家族や近所などの身近な大人や上の世代から教えてもらっていた。保育所が練習場所の宝立は「保育所の先生」という回答割合が高かった。



※小学生のアンケート回投票（n=606）から作成

図 - 6　学区別にみた太鼓の練習場所（複数回答）

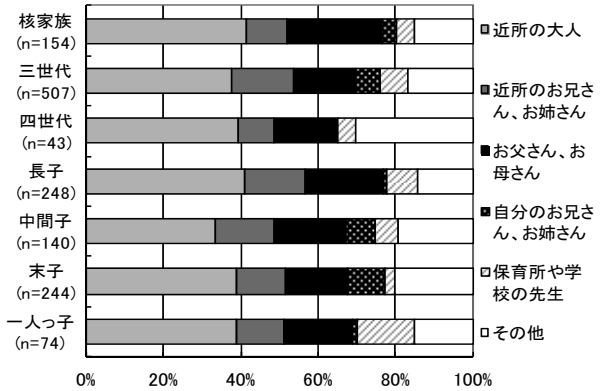


図 - 7　家族・兄弟構成別にみた太鼓を教えてもらった人（複数回答）

太鼓を始めた理由については，集会所で近所の大人や上の世代からの継承が行われている三崎は「親や近所の大人に言われたから」という回答割合が高かった。若山，蛸島，宝立は「保育所や学校の活動だったから」という理由をあげる割合が高い一方で，「自分がやりたかったから」という自発的な回答も次に多かった。「自分がやりたかったから」という回答が多かったのは，公民館を練習場所に先生が教えてくれる飯田，西部，直であった。

かねの練習場所としては，どこの地域でも「練習はしていない」という回答の割合が高かったが，太鼓の練習場所としてあげられた「集会所」（三崎），「自分の家」「近所の家」（正院），「公民館」（飯田），「保育所」（宝立）は同じ地域においては，かねの練習場所としてもあげられる割合が高かった。

横笛については，若山，三崎，正院，上戸，飯田，西部，直は太鼓と同じ練習場所の回答が多かった。太鼓の習得が学校や保育所で行われている蛸島や宝立では横笛は学校で教えられていないため，「近所または自分の家」で「自分のお兄さん」や「お父さん」に教えてもらったり（蛸島），「公民館」で「近所の大人」に教えてもらったり（宝立）と太鼓とは異なる継承過程がみられた。

3）家族・兄弟構成による「練習場所」「教えてもらった人」「始めた理由」の違い

一緒に住んでいる家族・兄弟構成によって，太鼓の練習場所に違いがあるのかをみたところ，四世代では「近所の家」の占める割合が他の家族構成に比べて高く，末子は「自分の家」，一人っ子は「保育所」の占める割合が他の兄弟構成より高いという特徴があったが，それ以外は家族・兄弟構成による差はほとんどみられなかった。太鼓を教えてもらった人（図 - 7）は，どの家族・兄弟構成とも「近所の大人」の割合が一番高く，家族・兄弟構成による大きな差はなかった。四世代では「その他」（公民館の先生や太鼓の先生，おじいちゃんなど）の回答が多い特徴があり，長子や一人っ子は「先生」から，中間子や末子は「自分のお兄さん，お姉さん」から教えてもらう割合が高くなる特徴がみられた。太鼓を始めた理由に関しては，核家族と長子は「親や近所の大人に言われたから」と回答するものが他の家族・兄弟構成よりも高く占め，四世代と一人っ子は「自分がやりたかったから」と回答する割合が高かった。一人っ子は，「保育所や学校の活動だから」の回答が次に多く，他の兄弟構成に比べても理由にあげる割合が高かった。

横笛の練習場所は，核家族と末子では「公民館」が多く，四世代では，「集会所」「近所の家」また「練習はしていない」の占める割合が他の家族構成に比べて高かった。一人っ子は「自分の家」の回答が多かった。横笛を教えてもらう人については，どの家族・兄弟構成とも「近所の大人」の割合が最も高かった。他の家族構成に比べると，三世代では「お父さん，お母さん」「自分のお兄さん，お姉さん」から教えてもらう割合が高くなり，四世代では「近所のお兄さん，お姉さん」に教えてもらう割合が高かった。中間子は「お父さん，お母さん」，「自分のお兄さん，お姉さん」から教えてもらう割合が他の兄弟構成よりも顕著に多くなった。末子

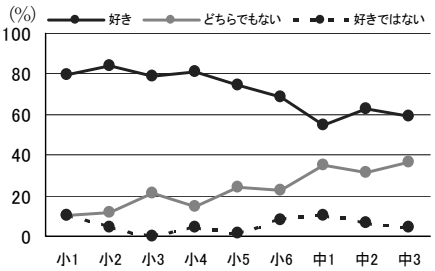


図 - 8　太鼓の「好き」感情の変化

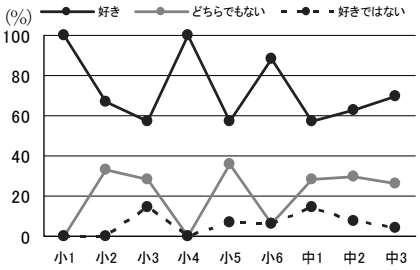


図 - 9　横笛の「好き」感情の変化

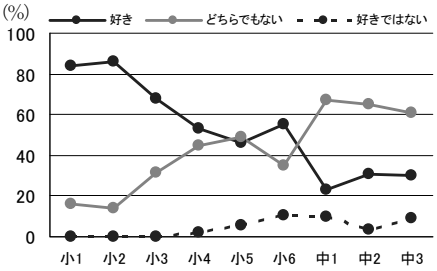


図 - 10　かねの「好き」感情の変化

はすべての項目の回答があり，「その他」の回答も多く，継承過程が多様であった。横笛を始めた理由は，どの家族・兄弟構成とも「自分がやりたかったから」の割合が最も高く，その次は，「親や近所の大人に言われたから」の割合が高かった。その中でも「自分がやりたかったから」は特に三世代と中間子が回答する割合が高かった。「親や近所の大人に言われたから」と回答する割合が高かったのは，核家族と一人っ子であった。

かねは，どの家族・兄弟構成とも「練習していない」が半数以上を占め，教えてもらった人は「その他(教えてもらっていない)」，「近所の大人」，「お父さん，お母さん」が多かった。四世代では「近所のお兄さん，お姉さん」，一人っ子は「保育所や学校の先生」の割合が他の家族・兄弟構成よりも多い特徴がみられた。始めた理由としては，四世代は「親や近所の大人に言われたから」が多かったが，その他は「自分がやりたかったから」が多かった。

4）学年による「好き」感情の変化

伝統芸能をやることが好きかどうかをたずねたところ，太鼓については，小学校4年生までは8割が「好き」と回答したが，小学5年生から下がり始め，中学生では6割前後となり，「どちらでもない」が4割近くに上昇した（図 - 8）。かねは小学2年生までは「好き」が8割を占めていたが，小学3年生から「好き」の回答が減少し，小学5年生で「どちらでもない」のほうが多くなった（図 - 9）。これは，太鼓やかねは，関わり始める年齢が低く，習得も比較的容易であるから，「好き」の持続が続かないと思われる。特に，小学生から中学生になる段階で「好き」の感情が大きく薄らいでいた。一方で，習得が難しく関わり始める年齢も高い横笛では，中学生になっても「好き」が 7 割前後で推移し，「好き」が持続する傾向がみられた（図 - 10）。

4．まとめと考察

本研究は，石川県珠洲市を対象に，小・中学校の校長へのヒアリングと小・中学生へのアンケート調査により，祭礼における伝統芸能の小・中学生への継承実態を把握することを目的とした。その結果，珠洲市の小・中学生の太鼓の経験者は 62.3%，かね 36.5%，横笛 14.7%，キヤラゲ 7.9%，獅子舞 3.6%であることが把握できた。

これらの伝統芸能の継承過程は，祭礼地区と学区がほぼ合致している小学校ごとに分析してみた結果，地域差が大きいことが明らかとなった。太鼓の継承者の割合が多い上位3小学校（全児童の 75%以上が経験者，表 - 2 参照；蛸島小・三崎小・西部小）では，それぞれ「学校」，「集会所」，「公民館」と継承場所や過程が異なっていた。この3校における継承活動をみてみると，地域の状況や要望に応じて，総合の時間を継承活動にあてたり，地域に任せる態度をとっていたり，放課後の伝承クラブに児童が通うことを全面的にサポートするなど，学校と地域がうまく役割分担しながら連携をとっていた。一方，継承者の割合が少ない小学校では，授業や公民館の教室などで選択的に習得できる環境を整えてはいるが，児童の自主性に任せており，全面的に学校と地域が連携して継承者を育成する体制は弱かった。もっとも，伝統芸能の種類によっては学校と地域の連携の有り方も異なる。太鼓より技術が必要で，継承者の数も少ない横笛をみると，継承者の割合が顕著に高い2小学校（20%以上，表 - 3 参照；西部小・飯田小）では，継承場所としては地域の公民館の割合が高かった。

これらの結果からみえてくる課題は，珠洲市の小・中学生への伝統芸能の継承は地域ごとに根付いた慣習にたよっており，太鼓は4割近く，かねは6割以上，横笛は8割以上の小・中学生に継承されていないということである。すなわち，少子化による量的な子どもの数の不足により祭礼文化の担い手の確保が困難になっているに関わらず，これまでの継承方法では巻き込みきれない子どもがでていることが読み取れよう。地域に根付いている継承方法を活かしながらも，巻き込みきれていない子どもを担い手として育成するための方法論が必要だと考えられる。

家族・兄弟構成も伝統芸能の継承に影響を与えており，家族構成では三世代や四世代，兄弟構成では中間子に継承者の割合が高いことが明らかとなった。練習場所や教えてもらった人といった継承過程に関しては，家族・兄弟構成による差はほとんどみられず，三・四世代家族や，兄・姉がいる中間子や末子でも，家族内で上の世代から教えられていることが顕著に多くなるということはなかった。多世代の家庭においても，曽祖父母や祖父母といった一緒に住んでいる上の世代の家族よりも，近所の大人や先生から習う傾向があった。また，身近な場所で身近な人から習うことが多い地域では，始めた理由に受身なものが多い一方で，始める理由に自発性が高いのは公民館などで地域の太鼓や横笛の先生から習うことが多い地域であった。このような結果から，地域の大人が指導的な立場をとって子どもに継承，育成する体制を地域全体で考えることが効果的であるといえる。

今回の研究では，祭礼を継承する人の問題として学校側の祭礼文化継承活動に焦点をあてたが，祭礼文化継承の対策を立てるための研究課題がいくつか残された。まず，祭礼文化継承活動は学校と地域双方の連携の仕方が大切であるため，地域側の実態も把握することが今後不可欠である。次に，効果的な祭礼文化の担い手育成の対策をたてるためには，祭礼文化や伝統芸能に対する子どもの意識を明らかにすることが必要である。さらに，祭礼で継承される対象の問題として楽器，舞踊，物資の調達や準備など祭礼を構成する要素に焦点をあて，祭礼文化継承の地域の最小単位である行政区ごとの祭礼における伝統芸能の関連性や重要さを検討することも必要である。従って，祭礼文化継承についての対策には，継承される対象と継承する人との相互の関係を明らかにすることが必要であり，今後の課題である。

謝辞

本研究遂行にあたり多大な協力をいただいた珠洲市教育委員会，珠洲市企画財政課に謝意を表する。また，調査にご協力いただいた珠洲市小中学校の皆様に深く御礼申し上げたい。

補注及び引用文献

1）相坂淳子（2001）：地域の民俗文化の伝承と子どもの関わり-祭囃子の学習過程を通して-：日本女子大学紀要家政学部 48，1-10

2）永井美紗・黒光貴峰・町田玲子（2003）：伝承活動が地域における子育てに及ぼす影響について-草津市下笠町における事例研究：京都府立大学学術報告　人間環境学・農学 55，27-33

3）熊澤栄二・堀内美緒・四方葵・佐々木理沙（2011）：奥能登珠洲における地域づくりに向けた祭礼の衰退原因の分析：ランドスケープ研究 74（5），667-672

4）堂下恵（2008）：祭事への外部者参加を通じた体験型観光および地域活性化の検討：日本観光研究学会第23回全国大会論文集，333-336

5）澁谷美紀（2001）：地域活性化資源としての活用に向けた課題：日本の農業-あすへの歩み-220　現代の民俗芸能-農村地域における伝承活動と地域活性化-，財団法人農政調査委員会，65-72

6）三浦俊一・大谷良光・立田健太（2009）：弘前ねぷた祭り運行団体と子ども・学校との関わりの現状と意識:弘前大学教養学部紀要 102, 125-132

7）キヤラゲとは，木遣り唄のこと。祭礼では，曳山の上で子どもがキヤラゲを唄いながら舞いを披露する。

8）奥能登広域圏無形民俗文化財保存委員会編（1994）：奥能登のキリコまつり：奥能登広域圏事務組合，86pp

9）珠洲市史専門編さん委員会(1979)：珠洲市史第4巻資料編：珠洲市，1264pp